

聖性が失われず、いかにして日常的な実践の場で用いられているのかを問うことは、相互の文化的受容のプロセスを見ることができ、多角的に異文化布教をとらえるための手がかりになると思われる。

伝統医療と社会福祉

——インドの一宗教組織の試みを事例に——

岡光 信子

近年、一度は廃れたように見えた伝統医療を見直すという動きが、世界的な拡がりを見せている。インドは、アーユルヴェーダをはじめとする複数の伝統医療の歴史を有し、中国と並んで伝統医療が医療制度の中で上手く機能している事例とされている。現在、インド中央政府は、厚生労働省に相当する保健家族省内に伝統医療を管轄する部署を設立し、伝統医療の普及、研究、教育環境の整備を進めている。

本発表の目的は、ナートトゥ・マルンドゥと呼ばれるインド・タミルナードゥ州に伝わる伝統医療の普及を村落部で取り組んだ一宗教組織の事例を、伝統医療の見直しという文脈から取り上げ、インドの医療環境と伝統医療を取り巻く状況、その位置づけや可能性について宗教組織の関連から考察を行うことにある。

カトリック教会は、「貧しい人に手を差しのべる」という「慈善」を重視しており、宣教地における慈善事業の伝統をもつ。インドは、国民の二五・七%が貧困線以下の生活状況にあり、公的な社会福祉の整備が進んでいない。特に、貧しい人たちに

とって、医療機関へのアクセスビリティは今でも多くの課題が残る。

一九七〇年代から九〇年代頃まで、カトリック女子修道会 SDS は、タミルナードゥ州の伝統医療であるナートトゥ・マルンドゥのメリットを活かして、医療機関へのアクセスビリティに難がある村落部においてナートトゥ・マルンドゥの普及に努めた。SDS がインド管区を設立したのは一九七三年のことである。活動の拠点とした内陸部の村落は非常に貧しく、衛生環境も整っていないかった。こうした劣悪な環境が人々の健康を著しくそこなっていた。SDS は、地域の事情に柔軟に対応した活動を行うことを旨としており、さらに保健衛生の分野では修道女の専門性を十分に活かし得たことが、ナートトゥ・マルンドゥの活用というプロジェクトに着手することを容易にさせたと考えられる。かつ、ナートトゥ・マルンドゥは、その原料が安価で、かつ身近にある素材から成るため、利用者の経済的負担が軽く、かつ副作用も少ないという利点がある。また SDS にとっても、会の負担で原価を下回る価格で人々に薬を提供する必要もなく、財政を圧迫するものでは無かった。

SDS のナートトゥ・マルンドゥ普及プロジェクトは、キリスト教の慈善の精神に基づいて、特に「貧しい人に対する救いの手を差しのべる」ことを実際に宣教地で実践に移した事例と捉えられる。このプロジェクトにおけるような、宣教地の事情に合わせた柔軟な活動を可能にした理由として、次の五点が考えられる。① SDS のインド管区設立が第二バチカン公会議の熱が冷めやらぬ時期であったため、修道院外にも活動の場を求

めることに妨げがなかったこと、②活動の初期の段階で管区長館と活動拠点が同じ場所であったため、プロジェクトの立案から実践に至るまでのプロセスに時間を要しなかったこと、③活動を行う修道女が管区の責任者である管区長を含めて少人数であったため、日頃から円滑な意思疎通が図られ、プロジェクト始動後でも柔軟な修正が可能だったこと、④SDSの修道女の多くが看護師資格を有しており医学的な知識・素養があったこと、⑤SDSの施療院と助産院での活動を通じて修道女と村人の間に信頼関係が既に醸成されていたこと。

SDSインド管区によるナットウ・マルンドウのプロジェクトは、カトリック教会の慈善の精神の発露として、地域医療の実践を現地社会の諸事情と修道会側の諸条件が合致する形で実現したもので、宗教組織による福祉事業の成功例と言うことができる。

一九二〇—四〇年代「精神療法」のなかの臼井式靈氣療法

平野 直子

本報告では、手当て療法「レイキ」の生まれたコンテキストを、同時代の療法——特に「精神療法」と呼ばれる、一九二〇年代から四〇年代の日本に特有の一群の代替療法——との関係に焦点を当てて描き出すことを目的とする。

レイキは一九八〇年代、ニューエイジ文化の中でヒーリング技法のひとつとして流行し、体験者は世界で百万人を超えるとも言われる。身体に手を当て、そこから「宇宙のエネルギー」を流すことで、心身の健康維持や自己啓発などに効果があると

いわれている。

レイキの世界的な流行は欧米から始まったが、その最初のルーツは一九二二年、東京で臼井甕男によって考案された「靈氣療法」にさかのぼる。臼井は靈氣療法を、断食などの求道と修行の結果得られた「独創」だと語っており、臼井の鞍馬山における「靈氣療法」感得の物語は、実践者たちにとってレイキのリアリティを支える強固な柱の役割を果たす。

しかし、一九二八年に臼井の「靈氣療法」に接した心理学者・小熊虎之助は、『サンデー毎日』に寄せた記事の中で、それを「精神療法」の一種だと見なしている。この場合の「精神療法」とは、吉永進一らの近年の研究（『精神の力——民間精神療法の思想』『人体科学』十六（一）、二〇〇七、九—二一ほか）が明らかにしているように、大正から昭和戦前期にかけて叢生した、健康維持や病氣治療に関する独特の理論や方法である。それらは催眠術、神智学やニューソートといった欧米由来の思想をベースに、東洋の身体技法から当時最新の生理学や心理学までの知識を、多彩な療法家らがそれぞれ独自の治療と健康法の体系に編成したものであった。

当時の新聞記事を見ていくと、医師以外が提供するある程度体系だった治療・健康法で、「心理」「精神」「霊」などを操作する技法を用いるものに対し、「精神療法」という言葉が使われていることが確認できる。しかし、小熊が「靈氣療法」を「精神療法」の一つと見なしたのは、単にそうした外形的な類似点のためだけとは言えないだろう。臼井の「靈氣療法」の論理や用語法、方法などの中核的な部分に、他の「精神療法」と